

# 仙台の暮らしを支えた 郷六の2つの堰

西大立目 祥子

この10年ほど、仙台の旧市街地を中心にまち歩きを楽しんできたのだが、準備運動のように取りかかるのは、まず地図を広げ、そこから新しい道路や施設をはずしていくことだ。高速道路をはずす。団地をはずす。工場もはずす。そして、等高線をたどり、曲がりくねる水路をながめっていると、だんだん原地形が見え始める。もともとの風景がイメージできるようになるのが、何とも楽しい。

みやぎ霊園のある郷六はどうだろう。地図を見て驚かされるのは、何と巨大な構築物がこの地域の上に乗っているか、ということだ。東北自動車道とインターチェンジ、西道路から続く愛子バイパス、そして丘陵地を開いて造成された折立団地が、現地地形を見えにくくしている。

だが、それらはずすと、西から峡谷の間を縫って流れてきた広瀬川が、郷六にかかったとたん、河岸団地の開けた地形の中で川幅を広げるようすがわかる。ゆったりと流れる川。郷六の地名の由来は、この川沿いに広がった土地の上を流れる川が、6つ地域を生んだことからついたらしい。

さて、巨大な道路を取り去ったところで、2つの堰が存在を主張し始める。「四谷堰」と「北堰」である。

四谷堰は、在仙研究者の地道な努力でその全貌が明らかにされてきたから、すでにごぞんじの方もいらっしやるだろう。江戸時代の初頭から仙台の町をすみずみまで潤して、300年間にわたって暮らしを支えた四谷用水の取水口である。仙台は広瀬川のほとりに生まれた町だが、そこは中流域であるために川面は町の標高より低い位置にあり、水の利用が難しかった。そこで、上流の郷六から水を取り、東流させたのである。江戸時代の土木技術者たちが山並みを眺め、標高を図り、川の水量を見て、郷六が最適地としたのだろう。堰は何度も洪水で流されたが、再建されてきた。まさに、ここが城下町仙台のライフラインの要であったのだ。

一方、四谷堰から600メートルほど下流に築かれているのが北堰である。じりじりと夏の日差しがきびしい昼下がり、郷六の屋敷とよばれるあたりで路地に入り川に近づくと、生い茂る青草の向こうに堂々とした堰が見えた。想像以上に堰は大きく、本体はコンクリートだが、端には玉石積みが残っている。もともとは、素朴な姿で川の水をせき止めていたのだろうか。

水は堀に導かれ、とうとうと流れに西道路の下をぐくっていく。そして山の中を走り、流れつくのは三居沢発電所だ。発電用の水になるのである。三居沢にあった紡績会社がこの水を使って発電し、初めて電灯を灯したのは明治21年(1888年)のことだった。

2つの堰から取り入れられた水が、いまなお暮らしの中で役立てられていると思うと感慨に打たれる。四谷堰から取り入れられた水は塩釜へ流れて工業用水になり、三居沢発電所で起こされた電気は仙台の夜を照らしているのだから。

城下町仙台の西の入り口、八幡町まで2キロほど。郷六の人たちは、もっともっと主張している。仙台の暮らしを支えてきたのはこの地ですよ、と。



広瀬川北堰

西大立目祥子 (にしおおたちめ・しょうこ)

フリーライター。地元学の視点で仙台市内のまちや広瀬川について執筆している。著書に『仙台まち歩き』(河北新報出版センター)『仙台とおき散歩道』(無明舎出版)。